

## 「核の時代…広島から現代まで」を終えて

宮本ゆき（米国デューポール大学准教授）

本稿では、今年の5月21日にシカゴ大学で「核の時代…広島から現代まで」と題したシンポジウムの概略と、未だ予断を許さない福島の原発問題に関して、「反原発派と原発推進派の反省点を含め、私の考えをまとめたいと思います。

## シンポジウム

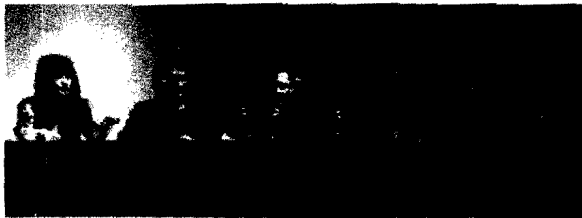
発端は、シカゴ大学という1940年代に核開発で先鋒を担った場所で原発、劣化ウラン、原発問題などの授業を持つノーマ・フィールド、2007年の原爆展（モンタナ州）で地元の保守系コラムニストから批判を受け、原発推進関係者にフィールド・ワークを続けているモンタナ州立大学の山口智美、そして原爆の授業に加え、広島・長崎への研修旅行をシカゴのデューポール大学で行っている私の3人が、核の問題について、特に核兵器と原子力発電所の問

題が乖離していることに喚起を促し、つながりについて示唆しようということとで企画したシンポジウムでした。第一のパネルはアメリカにおける核実験の被害、続く第二のパネルは原発の被害という構成にし、それぞれドキュメンタリー映画であるM・T・シルヴィア監督の『アトミックマム』、鎌仲ひとみ監督の『ミツパチの羽音と地球の回転』を基にディスカッションを進めることとしました。その準備中に震災が発生し、福島原発の事故が起こりました。原発事故は（現在もですが）予断を許さない状況が続く、そうした緊張の中でシンポジウムは開催されました。

島津の被爆者岡田恵美子さんとその娘さんへと導かれていく様子を、アメリカの大衆文化の核兵器の消費を背景に描かれていく『アトミックマム』で幕を開けました。シカゴ大学の人類学者ジョセフ・マスコーと、米国原子力科学者発行雑誌の代表を務めるケネット・ベネディクトは、ドキュメンタリーで描写されたアメリカにおける核兵器、核産業の変遷を豊富にリサーチで裏付けました。それは、核兵器に関する「知識」の構築と、「知識」の偏重の歴史でもあります。例えばソビエト連邦と

ベネディクトの発表が科学者の倫理とその後の核産業との関係について触れ、一般の市民も無関係ではないという主張で終わると、後続の科学者シドニー・ネーグルは、映画の中のポーリーン・シルヴィアの抱える良心の呵責に言及し、科学者の道義的責任についての問題を投げかけました。こうした問題は次のパネルにおいても重要な主題の一つとなります。

第二部は山口県上関の原発立地に30年近く反対してきた祝島島民を中心にした鎌仲監督の『ミツパチの羽音と地球の回転』で始まり、鑑賞後のパネルは、鎌仲監督、原発推進派の物理学者ロバート・ロズナー、脱原発派でシカゴに拠点を置くデイヴ



第1部のパネリスト 左より筆者の宮本、シルヴィア（監督）、マスコー、ベネディクト、ネーグルの各氏

イッド・クラフト、そして山口智美をパネリストに迎え、ノーマ・フィールドの司会で行われました。

鎌仲監督が前作2部を含め放射能に関する映画を3作撮り続けたきっかけとなった、劣化ウラン弾による様々な放射能障害の症状に苦しむイラクの子どもたちとの出会いについて語った後、ロズナーは、苦渋の決断であるものの原子力を支援すると言明。原子力は詰まるところ、発電用にする兵器用にして、知識と技術は同種のものであり、核兵器廃絶・脱原発を押し進めることは、科学者がその知識と技術を失い、更には文民に対し軍による知識と技術の占有にもつながる可能性を指摘。ロズナーの発表は核兵器廃絶・脱原発のその後の情勢を喚起した点において、単なる反核、反原発を確認するためだけではない当シンポジウムに重要な示唆を与えました。

クラフトは、我々の電気に対する「態度」を「電気消費中毒」と呼び警鐘を鳴らすと共に、イリノイ州の原発事情を交え（イリノイ州の原発の4基は、福島原発と同じ型であること。いずれもGE製、代替エネルギーにより脱原発が充分可能であると主張。

と主張。

山口は、鎌仲監督の映画では触れられなかった山口県の上関町の原発推進派について報告。原発推進派全体が必ずしも直接の利権のみで結びついているわけではなく、山口が5年越しでインタビューをしている保守系の推進派は、原発誘致が地元経済と文化を活性化するという信念に基づいていることに言及。原発推進派が利権行為のみで結びついた一枚岩ではなく、地域の暮らしに密着した活動でもあることを重層的に描いてみせた山口の発表は、原発が地域経済にとつて起死回生の切り札として使われてこざるを得なかった日本の過疎や貧困の事実、都市対峙といった構図を浮き上がらせることで、利権という経済行為のみで語られることの多かった原発問題に一石を投じました。

プログラム最後のラウンド・テーブルでは、第一部、二部のパネリスト全員と、シンポジウムのオーガナイザーが壇上に登り、視聴者からの直接の質疑応答を行い、時間を延長しての閉幕となりました。

以上、シンポジウムでは、原発問題が単なるエネルギー政策の問題で

はなく、(科)学者、労働、経済、メディア、地域社会のあり方という様々な問題に抵触していること、それ故、この問題においては一人ひとりの世界観、価値観の検証が迫られていることが明らかになりました。

### 安全神話と現実と

価値観、世界観、という観点から言うと、事故後、「想定外」という言葉が原発の安全性擁護のため多用されました。しかしその後、福島原発モデルの老朽化、あるいは災害に伴う電源喪失の可能性が指摘されていた事実などが浮上り、原発の安全神話は単なる情報隠蔽の上に築かれたことが露呈されました。むしろ安全神話は、「想定内」の仮定を考慮して作りあげられたのではなく、原発が運転できる環境を「想定」してその「想定内」の「仮想現実」においてならば安全に運転可能だ、ということに他ならなかったようです。

しかし、この想定された仮想現実、つまりフィクションには、ある種の「都合の悪いコト」や「人々」が閉め出されています。例えば原子力廃棄物の問題。廃棄物が出ることで、そしてその安全な処理法は未だ考案

されていないことは周知であるにもかかわらず、再処理工場が十分に機能していないままに、廃棄物はまるで「想定外」であるかのように、ひたすら「なかつたこと」として地中に埋められています。青森の六ヶ所村、アメリカのユタ州、そしてフィンランドのオンコロで。特に3番目は、膨大な高濃度の核廃棄物がほぼ無害になるまで一万年間保管するという使命を帯びた建設中の地下倉庫です。このオンコロ施設を取り上げたドキュメンタリー映画「二万年後の安全」(The Future)では、一万年後の人類(が、いるとして)に、この施設の危険性を如何にして伝えるか、が主題でしたが、私には、施設完成までに後100年を要するという事実の方が一万年先のコミュニケーションよりも荒唐無稽に思えます。100年後の技術などそれこそ「想定外」で、資本回収が22世紀というこの工事の資金源も謎です。ここに及んでは、現実がファンタジーを凌駕しています。

重要なのは、神話やファンタジーの対極と考えられた科学技術の最先端である原子力という「現実」は、実のところ、神話や「想定」のフィ

クションに立脚しているという認識  
 かもしれない。実際「現実」を生  
 きるにはある種のそうした想定は不  
 可欠で、例えば、私たちが「日常」  
 と呼ぶ暮らしは裏を返せば大規模災  
 害は（さしあたって今日は）起ら  
 ない、と信じていることで成り立っ  
 ているという現状です。だからこそ、神  
 話一般、とりわけ安全神話は吸引力  
 があるのでしょう。しかし、文字通  
 り神話の暴走を許した過去を抱える  
 社会に生きる私たちは、この意味を  
 慎重に考慮する必要があるでしょう。

かくいう私も核兵器廃絶は火急の  
 懸案であり、原発については明らか  
 に「次点」の位置づけをしています。  
 た。そういう意味では、私も原発の  
 「安全神話」に引き寄せられていた  
 のです。私にとっては、核兵器廃絶  
 で心配される「テロリストによる核  
 兵器所有」の可能性よりも、実際に  
 国民国家によって2万発所持されて  
 いる核兵器の方がよほど「現実的」  
 に危険だと思えましたし、今でも思  
 っています。

体、環境への懸念にさいなまれる人  
 たち、そして原発による交付金無し  
 には成り立たない地域経済を憂える  
 人たちが抜け落ちていた、と言わざ  
 るを得ません。私が核兵器廃絶で  
 「守りたい」と（傲慢にも）思っ  
 いたのは、私自身と、その他の抽象  
 的な「人々」であり、そこは、前記  
 のような具体的な人々を欠いた世  
 界でした。

むしろ、これらの人々の声が私た  
 ちの現実に反映されていたら、原発  
 は現在日本に54基もなかったでしょ  
 う。つまり、原子力産業は、こうし  
 た声を塞いだ仮想の世界でのみ成り  
 立つもので、それは、あたかも原爆  
 開発に従事した科学者が、いざ使用  
 の段階で初めて反対表明の署名を集  
 めた事例が示すように、完成して初  
 めて、それによる具体的な被害者が  
 現実的となった、という事実と呼応  
 するでしょう。

シンポジウム後、パネリストの一  
 人であった原発推進派のロバート・  
 ロズナーと話をする機会がありまし  
 た。代替エネルギーが未だ市場競争  
 力が弱く、エネルギー供給は原子力  
 発電で賄わざるを得ない、と彼が言  
 ったことに對し、私が「原子力が安

いのは、日本同様、政府の補助金や  
 研究助成金が代替エネルギー開発よ  
 り原子力産業に流れているからで  
 は？」と質問してみたところ、それ  
 は科学者の関与するところではなく  
 政治家の仕事だ、といった旨の返答  
 を受けました。実際科学者は研究助  
 成金の流れを操作する立場にはない  
 ことを考えると、ロズナーが必ずし  
 も間違っているとか、不道徳なので  
 はなく、ある種の発明とその普及は、  
 特定の人々（外国人であったり、女  
 性であったり、身体障がい者であつ  
 たり）を排除することで可能となつ  
 た側面がある、ということでしょう。

また、原発推進派の中には、原発  
 を止めると日本の国力・経済力、技  
 術力が落ちるといふ懸念があるよ  
 うですが、こうした世界観にも、日  
 本の国力という抽象的な概念の裏で、  
 具体的に経済力の恩恵を受けられな  
 い人たちが被災者が除外されていま  
 す。（しかし、山口の発表が示唆し  
 たように、地元の経済復興を真剣に  
 憂慮する具体的な人たちの声を踏ま  
 えて、原発が一番効率よく地元経済  
 に貢献する、という理由で推進して  
 いる人々もいると思われるので、  
 地元経済が潤い、都会に搾取される

ばかりの地元といった構図を変える、  
 その他の手段を提示していく必要が  
 あるでしょう。）

つまりは、私たちが認識する世界  
 —それは往々にして神話や「想定」  
 といったフィクションに裏打ちされ  
 ているのですが—に、どれだけ多く  
 の人の現実を受け止める想像力を養  
 えるのが、原子力の問題だけであ  
 るのか、今後の「世界」を変えていく力  
 になると思います。そして、なぜ多  
 くの人の現実を反映させる世界を私  
 が支持するかと言えば、それこそが  
 神話の暴走に對抗できる手段だから  
 と信ずるからです。

最後に字数の制限で、パネリスト  
 の経歴を割愛せざるを得なかったの  
 で、詳細については、以下のサイトを  
 を参考にしてください。

<http://www.atomicnom.org/jp/trailer.htm>  
<http://lucian.uchicago.edu/blogs/atomicage/aboutsymposium/>  
<http://88search.net/index.html>

宮本ゆき氏 米国DePaul大学准教  
 授。原爆論説を分析した『Beyond the  
 Mushroom Cloud』を今秋出版。その他  
 論文に、倫理学と差別意識の問題を念頭  
 に青山妙子の作品を分析した『Fire and  
 Femininity』がある。広島と長崎を訪れ  
 る研修旅行を現在までに3度引率。

■第29回市川房枝女性の政治  
参画基金の応募締切りが近づ  
きました

助成課題 女性の政治参画、選  
挙と政治の浄化に関する活動  
や調査研究

助成対象 原則として女性  
選挙の基準 独創的で、現代的  
問題意識のあること/原則と  
して助成決定後1年以内に相  
当の成果があること

助成金額 総額30万円  
助成件数 原則として1件

助成対象者の義務等 ①活動の  
経過・結果及び会計に関する  
報告書の提出。②活動の成果  
を発表する場合には当基金の  
助成を受けたことを明示する。

募集期間 7月1日～8月31日  
審査 市川房枝女性の政治参画  
基金事業選考委員会  
審査結果の通知 11月1日

助成対象者発表方法等 11月12  
日 財団創立記念のついでに  
発表・助成金贈呈

応募方法 所定の応募用紙に記  
入(日本語)の上、委員会宛  
郵送。HPからもダウンロード  
できます。

応募先及びお問合せ先 (財)市川  
房枝記念会女性と政治センタ

1

■通史・女性史セミナー案内  
総合女性史研究会(学術会議  
参加団体)の企画協力により、  
女性史セミナーを開講します。  
お申し込みは事務局まで。

テーマ よりよく生きようとし  
た女たち―歴史に学ぶ日本女  
性のあゆみ―

期間 10月13日～2012年2  
月9日、毎月第2木曜、13時  
半～15時半

受講料 7000円(全5回。1  
回は1500円。基本は全回  
通し。当財団維持員、総合女性  
史研究会会員は6000円)

定員 30名(申し込み順)  
第4回 森代 10月13日

テーマ 村の刀自・たらちねの  
母・宮廷の女

講師 伊集院葉子(専修大学東  
アジア世界史研究センターリ  
サーチアシスタント)

第2回 中世 11月10日  
テーマ ルイス・フロイスが見  
た―中世の女性たちの生き様

講師 西村汎子(白梅学園短期  
大学名誉教授)

第3回 12月8日  
テーマ 近世女性の肖像 思索  
したあや子・訴訟を起こした  
たよ・反対の性を生きたたけ  
講師 長島淳子(国士館大学非

常勤講師、早稲田大学エクス  
テンションセンター講師)  
第4回 近世 12年1月12日  
テーマ 時代にあらがった女た  
ち

講師 金子幸子(日本女子大学  
非常勤講師)

第5回 2月9日  
テーマ 「平等・開発・平和」  
を求めつづけて

講師 伊藤康子(元中京女子大  
学教授)

■女性展望カフェ、9月のゲ  
ストは仁木ふみ子さんです  
日時 9月13日(火) 14～16時  
テーマ 中国と日本のはざま  
で 戦後を生き抜いて

定員 30名(要予約)  
参加費 2000円(茶菓付)  
読者と当財団特別維持員の方  
は1割引

■近況  
▼6月3日、東京法務局へ財  
団名称変更登記▼20日、執行役  
員会▼30日、テナント301号  
室(特アトリエ福(風景設計・  
まちづくり計画)と契約▼7月  
3日、ワークショップ準備打合  
せ▼5日、展望編集会議▼6日  
就業規則検討会議▼9～10日

ワークショップ(別掲)

■ワークショップ盛況に終了  
7月9・10日  
初企画WS「ジ  
ェンダー平等政  
策をどうつくる  
か」第3次男女  
共同参画基本計  
画を手がかりに―を開催。全国  
から地方議員、男女共同参画行  
政担当、研究者、女性団体活  
動家と講師ら総勢50余名が早朝  
から熱心に学習しました。追っ  
て本誌に掲載予定ですが、ジエ  
ンダー統計、無償労働(アンペ  
イド・ワーク)、ジェンダー予  
算の基礎知識を学びながら、実  
際に政策・事業計画をグループ  
に分かれてつくることまで、  
密度の濃い2日間でした。

■展望カフェに秋尾沙戸子さん  
3月号の「著者と語る」で好  
評だった秋尾さんを7月12日の  
カフェにお迎えしました。  
「ワシントンハイツ」で見せ  
た緻密な調査ぶりが、東欧の民  
主化を追い、インドネシアに通  
いつめてメガワティ大統領誕生  
の背景に迫ったことなど、様々  
なエピソードを混じえた話から

もうかがえました。「もう少し  
突っ込みがほしい」という  
声や、「バイタリテイ溢れる行  
動力に元気をもらった」の感想  
が寄せられました。

■読者通信欄(敬称略)  
●第3次男女共同参画基本計画  
の行方が気がかりです。情報の  
フォロワーをよろしく願いま  
す。(埼玉県・山内恵)

■編集後記  
●猛暑も残暑も吹っ飛ばそうと、  
隔月カフェ開催。ご来店(久  
●安全神話はじめ知らないうち  
に何かに洗脳されている?(今)

**女性展望** 2011年8月10日発行 第639号  
定価400円(本体381円)/送料60円/年間購読料4500円(税・送料共)  
発行人 黒目黒依子  
発行所 (財)市川房枝記念会女性と政治センター出版部  
東京都渋谷区代々木2-21-11 婦選会館 〒151-0053  
電話 03-3370-0239 FAX 03-5388-4633  
E-mail: fitikawa@trust.ocn.ne.jp  
http://www.ichikawa-fusae.or.jp  
印刷所 有山印刷所 東京都荒川区東日暮里5-39-1-1F  
●維持員の購読料は維持費(年間10,000円)に含まれます  
●記事の無断転載は固くお断りします ●本誌は中性紙を使用しています